

現代青年の社会的性格

今 西 康 裕

本論では、人生の早期から数多くの競争にさらされるために、その競争の結果にかかわりなく、概して疎外感にさいなまれるようになった現代青年の社会的性格を考究した。

そして、その中核には、かれらの対人関係の質・量両面における希薄化の結果として、また現代社会において支配的な達成価値・生産価値へのアンチテーゼとして、独特の他者志向＝「やさしさ」が存在すると想定し、この心性がかれらの今日のさまざまな行動、人間関係を規定している実態を、著者自身の実感も踏まえ多面的に考察すると同時に、その将来に向けての発展可能性を探った。

はじめに

「居場所がほしい。」

最近の青年たち¹⁾の言動からは共通してこうしたメッセージが発せられているのを読み取ることができる。

かれらの間でのいじめも、かれらが「行く場所を失っている」ため、「いじめめる子もいじめられる子もさみしい」²⁾がゆえに継続・反復されるのであり、他方、自らの所属する学級集団にはなじめないものの、いわゆる「保健室登校」を繰り返す者の姿にもこうした居場所を求める志向を認めることができる。

また、今日、地域社会の共同性の喪失が言われるなかで、かれらはそこに「たまり場」を形成し³⁾、また、家庭や学校、身近な地域社会にさえ自らの居場所がないと感じる者は、宗教集団や遠隔地の民間養育施設、フリースクールにこれを求めるのである。

そして、これらの諸例からも明らかなように、かれらのいう居場所とは決し

て物理的空間のみを意味するものではない。

「うさぎ小屋」と評されるわが国の住宅事情のもとにおいても、多くの青年は自宅に自分だけの個室をもっており、物理的空間の占有の面では、過去に比してかれらはむしろ恵まれた状況にあるといえる⁴⁾。

にもかかわらず、その「豊かな」家庭においても羽を休め、安らぐことのできない者が増加しているのであり⁵⁾、すなわち、ここでいう居場所とは、そうした物理的側面だけでなく、他者とのコミュニケーションを通じて、精神的安定感を得ることができるような、心のよりどころ、まさに「居心地」のよい空間を意味しており、より社会・心理的側面に重心を置いたものである。

かれらは今日、こうした居場所を得ることができないために、文字どおり本当の自分、他者とのかかわりのなかで確定される「自らの分」を得ることができず、自己に不安定感を覚えるのである⁶⁾。

そして、その結果、かれらは現代に特徴的な性格類型を作りあげる。

それは一体どのようなものであろうか。

本論では、このような独特の心性を有する現代の青年の実像や実態、社会的性格を、辛うじてその範疇にある著者自身の心的体験をも踏まえ⁷⁾、より広範により深く考究していきたい。そして、そこから、最終的には、未来に向けてかれらがいかなる可能性を有しているのかについても言及したい。

第1章 自己実現の場としての「居場所」

現代社会には、競争的意識・思考が充満している。無論、それは、今日の産業社会が進歩と成長・発展を絶対の命題とし、実際に万人に競争の機会を数多く提供するためである。主なものを拾ってみても、受験競争、就職における競争、出世争いなど人生はさまざまな競争の連続であり、人々の自己意識も他者との比較・競争を中核とするようになる。

青年たちも、「人並み」を強調しつつ他者との競争をあおる「一緒懸命」な親や競争社会を生き延びるためのテクニックや心構えを羅列するかれら向けの雑誌からの作用などもあり、「人生の競争の儀式を18歳と15歳に押しつけ」（中央教育審議会1991年答申）られるなど⁸⁾、こうした社会の潮流から逃れることはできない⁹⁾。また、それだけでなく、かれらは、その人生のうちでもっとも

頻繁に他者との比較を行う時期にある。

結果、多くの者のうちには劣等感・孤独感などの疎外の心理が支配的となる¹⁰⁾。競争は、その勝者にポジティブな、また敗者にネガティブな自己評価を与えるものであるが、人生の現在、過去、未来の各所に多数存在する競争の機会すべてに「勝利」した、または「勝利」できると積極的に確信できるほどの自信家はそれほどいないからである。

また、そうした競争は、あくまで多面体としての個人の側面を単一の尺度で測定した「ゲーム」であり、さらに今日的な競争においては、その競争への参加が（個人の適性を考慮したうえでの）自発的・主体的なものでない場合が多く、加えてその競争の「勝敗」をも自らの手によって判定が下せないために、また、たえず追求するごとに肥大化する欲求は、最終的に決して充足されることはないにもかかわらず、常にかれらを現状に止めず、次なる競争に駆り立てずにはおかないために、かれらのうち受験競争など人生におけるそれまでの競争において「勝利」したとされる者のなかでも、十分な心理的満足や自己肯定を得るには至らず、物足りなさや無意味感・徒労感を感じる者が少なくない。

さらに、競争とは、並列しているものを縦列化させる作用であり、他者とは異なる「自分だけ」の位置におかれる自己は、その競争の勝者敗者の別なく孤独感にさいなまれるのである。

そうしたなかで、現代の青年は、次第に達成価値・生産価値よりも共同性価値・存在価値を重視するようになる¹¹⁾。

すなわち、「孤独の重さと自己存在の軽さのあまりに大きなギャップ」を痛感しながらも、「それでも生きてゆかなければならない」と決意を新たにすかれらは、競争的な価値観から積極的・消極的に逃避して¹²⁾、自他に優劣の判定を下し両者を差異化する他者との比較・競争ではなく、他者との協同的・協調的な共生関係¹³⁾、さらにはその上での、すなわち自他の相互承認に基づく「自分らしさ」、自己実現を求めるのである¹⁴⁾。

そして、「はじめに」でも述べたように、まさにこうした他者との共生関係を結びつつ「自分らしさ」を十分発揮・実感できる空間、これこそがかれらの言う「居場所」なのではないだろうか。

それは、われわれを競争に駆り立てる動機となりながら、そうした競争の結

果としては得られることの少ない性質のものなのである。

第2章 自己確立と対人関係

ともあれ、ここで、われわれは、この一連の心的過程には、重大なパラドックスが含まれていることに気づく。

「いかなる人も、一つの自己完結的な島などではない。人は誰も、大陸の一片であり、本土の一部なのだ」¹⁵⁾。

つまり、他者との競争・比較による精神的疲弊から劣等感・孤独感などの人間存在にとってネガティブな諸感情を生起させる個人は、それゆえに、またそれを超克し「自分らしさ」を感得してより個性的存在となるために、ここでもやはり他者の存在を不可欠なものとするのである¹⁶⁾。

かれらの言う「居場所」とは、本来、外界から断絶され、その内部に自分だけが籠もるといった密閉空間ではなく、外界に対して開かれた「窓」や「扉」をもつ「通気性のよい」空間なのである。

特に、日本社会においては、他者との共通性を基盤にし、かれらからの社会的承認を得た異質性を有しているか否かが、その人間が「個性的」であるかどうかの基準とされる傾向が強いため、「居場所」がもっているこの「窓」や「扉」の意義は大きい¹⁷⁾。

だが、この場合の、自らの孤独感を癒してくれる存在、また「自分らしさ」の認定者としての他者は、先の自らの競争相手としての他者ではない。先の他者が、競争の基準となる事柄（例えば、学業成績）においてのみ、「他者」として自らに立ち現れてくる、いわば「数値」化、「モノ」化が可能な他者であったのに対し、ここで言う「他者」は、自らと同じように喜怒哀楽の感情をもち、ときどきにさまざまな人間的側面をしめす可能性を有した多面体としての他者なのである¹⁸⁾。

しかし、現代の青年にとって、こうした他者との関係性の構築は容易ではない。

これまでの成長の過程において、競争的にとらえていた他者とのかわり方を180度方向転換して「和睦」、すなわち協同的な関係を結ぶことは、同じくこれまでの成長過程において、先述のような諸感情を有する多面体としての他者

との関係構築のための技能を十分に習得していないかれらにとって、想像を絶する困難性を有しているのである¹⁹⁾。

第3章 現代青年の性格特性としての「やさしさ」

そのため、かれらの大部分は現代に特徴的な性格特性を顕在化させる。

すなわち、他者との過同調の傾向を有した極端な気遣いや親切、「やさしさ」に満ちた青年の登場である²⁰⁾。

かれらは、他者を希求している上に、不完全な自己が他者からの攻撃にさらされないようにという自己防衛的な動機も働き²¹⁾、また、それまでの成長過程において、「やさしさ」に満ちた両親²²⁾の社会化作用や学校教育などを通して他者と協調的関係をむすぶことに正のサンクションを与える日本社会の集団主義のエートスの内面化もあって、まるで自らの無力さ、無抵抗さを公然と提示するかのように他者に対して際限なく「やさしい」。

しかし、このようなかれらの「やさしさ」は、その大半が利己的な動機から生じたものであるため、それが他者に対して与える作用まで「一人よがり」に仮定してしまいがちであり、しかも、本来は自己が守られ、さらにはこれが余すところなく実現されれば、その機能は十分に達成されているにもかかわらず、われわれには、さらにそれ以上のものを反対給付として他者から望む性向が存するため、「自分はこれだけのことを（相手に）しているのに」という徒労感・不充足感を生む場合が多い。

また、その「やさしさ」の一表出として、かれらはかかわる他者に応じて自らを目まぐるしく変化させるプロテウスの人間（R・J・リフトン）ともなる²³⁾。

その結果、かれらは、「自分らしさ」、自己確立をめざして他者とかかわりながら、ますますそうした「本当の自分の姿」がわからなくなるという、循環の構図に巻き込まれる。

外界に対して開いた「窓」や「扉」を通して、他者とかかわる自己は、複数あるそうした「窓」や「扉」のそれぞれで、各々の他者と個別に対応しようとするために、これに忙殺され、ふと気がつけば、自己が居るその「部屋」は、疲労困憊した自らの心身を休ませ、ゆっくりと自省する場、「本来の自分の居

場所」として機能していないという感慨に支配されるのである。

さらに、こうしたかれらの他者に対する「やさしさ」は、文字通り自らと「関係」のある、また、関係をもたざるを得ない他者に対しての「やさしさ」であり、例えば、駅で偶然同じ電車を待つため居あわせた他者にも向けられるような、普遍的なものではない。

「関係」のない他者に対しては、かれらは依然としてまるで「モノ」を扱うかのように無表情に冷ややかに接する²⁴⁾。

テレビ世代のかれらにとって、このように「やさしさ」と「冷淡さ」とをチャンネルのごとく切り替えるのはおてのものであり、無関係の他者に対する冷淡さに関しては、先にも挙げたかれらの対人関係スキルの稚拙さがそうさせるのであり、日本の「うち」「そと」を明確に峻別する文化的傾向、後にも触れる感情表出を忌避する今日的傾向がそれをさらに補強するのである。

また、かれらの「みうち」に対する「やさしさ」も、熱すぎず、冷たすぎず、「ウォーム」なやさしさ²⁵⁾である。

かれらは、友人・知人に対して、窓際で、あるいは戸口で、丁寧な対応を繰り返すが、決して「部屋には上げない」²⁶⁾。

より具体的・象徴的には、一緒に居ながらもこれといった感情的交流もなく、お互いに関心でファミコンにでも興じているような関係。これが今日のかれらの望む理想的な人間関係なのである。

かれらは、自身の「本当の気持ち」、「自分らしさ」や「自分とは何か」を自主的・主体的に明確化し、これを自他に示すことができない。また、(かれらのように)自己の能力や価値についての自己評価が低い場合には、自らの内的世界を他者に伝え、深いレベルの相互交流を図ろうとする気持ちは失われがちになる²⁷⁾。さらには、かれらは、最終的には他からの干渉や管理を排した「個」の確立を志向している²⁸⁾。それらゆえに、かれらは、こうした自己の内面にまで踏み込み、詮索し、自己開示を迫って精神的な不安定性を与えるような他者や深まりゆく感情を嫌悪する²⁹⁾。

例えば、こうしたかれらに「自分をさらけ出したいくない意識を感じ」ながらも、なお深くかかわろうとする教師は「先生には、自分の内面に踏み込んでほしくない」³⁰⁾と拒絶されるのである³¹⁾。また、このように安定性を欠いた自己

の内的世界を想起させるような他者間の親密な人間関係にもかかれらは不快感を示し、これにかかわる人々を自己の周囲から排除しようとする。

自分の心の奥深いところまで踏み込んでくる他者やそうした感情は「ウットーシイ」であり、お互いにこれを了解し、また、他者への直接的な表現が、他者に感情的反応をもたらし、ひいては自己の動揺をも誘発する危険性が高いことを十分に認知している³²⁾「やさしい」かれらの間では、たとえ「親友」といえども「本音を語るのは格好悪い」³³⁾ため、「心の深いところは出さないでつきあう」つきあい方が主流となるのである³⁴⁾。

結果として、現代の青年は、「他者を傷つけない」、「あたりさわりのない」事柄を話題にし、感情を抑制した表層的・表面的な友人関係を築く³⁵⁾。また、そこから、他者とつながってはいるものの、さまざまな人間的感情を有した自己の全人的な実現がなされているとは実感し得ないため、「本当の自分の居場所」のなさを依然として訴え続けるのである。

また、そうであるがゆえに、逆に、かれらは、自己に明確な役割を付与し、その結果、他者をも自己をも傷つける心配なく、より感情豊かに全人的な他者との連帯をはかることが可能な場や機会を求める。

新(々)宗教への入信や今回の震災ボランティアとしての青年の活躍は、この事実を如実に物語っている。

そうした場でかれらは、まさに「人類の救済」などの明確な「使命」を自覚することによって、「自分は一体何者なのか」、「自分は(世の中の)何の役にも立っていないのではないか」という自己不確定感や無能感を解消し、積極的、全人的に他者とかかわっていくことができるのである³⁶⁾。

ところで、先の他者の内面への洞察、感情的な対人関係忌避の一般的傾向は、(他者が自らの意識のうえで競争相手であったところと類似して再び)他者やその行為の感覚・感性的あるいはシンボリック的、記号的認知を促進する。

元来、余分な言語・身体表現を究極の段階まで捨象していった到達点としての俳句・短歌や能楽を育んだ「一を聞いて十を知る」わが国独特の文化的風土に育ったかれらは、今日ますます「印象」や「イメージ」による判断に親和的となる。

言うまでもなく、知識注入型に大きくシフトした学校教育は、われわれの洞

察力や論理的思考能力にはネガティブな作用を及ぼすのであり³⁷⁾、マス・メディアが視覚や聴覚など人間の五感の一部に働きかけ、対象の立体的把握を困難化させる³⁸⁾こととあわせて、この感覚的他者認知の傾向を強化するのである。

そこから、今日の青年のファッションやおしゃれ、清潔さへの強い志向性³⁹⁾も理解できる。

かれらは、それらが「不完全な」「生々しい」自己を他者の眼から隠蔽する心理的なバリアーであるという事実とともに、他者がそれらを基準にして自らを「見た目」や「外観」で判断するということを十分心得ているのであり、そうであるがゆえに、「誤った判断」をされないようにという警戒心からも、それらに常に過敏となり、さらにはブランド品など「もの」の所有やその（所有する）「もの」の差異によって自らの個性を代表させ確立しようと試みるのである。

このことは、かれらの「明るさ」にも共通する。

確かに、自分の「部屋」を訪ねて来た他者に対して、たいていの者は「明るく」応対するのであり、「明るさ」は、良好な対人関係を構築するために不可欠な普遍的要件の一つであろう。

また、今日のマス・メディアはそのスポンサーの意向⁴⁰⁾もあり、「明るさ」を強調するのであり、そこからの影響も考えられる。

しかし、さらにまたここでも、かれら自身の劣等感や孤独感を自他双方が直視することへの恐れから生じる反動形成として、これを考えることも可能なのである⁴¹⁾。

その証拠に、かれらは、逆に、自己の内面を内省することを想起させる他者の「暗さ」や「まじめさ」を極端に嫌うのである。

「暗さ」や「まじめさ」、そして先の「不潔さ」。これらはいずれも、現代において社会問題化した子どもたちのいじめ場面で、被害者となりやすい子の特性として指摘されるものなのである。

そして、現代の青年のように、感情を抑制し、表さないでいると感情そのものが失われていくために、かれらは先述のごとく感覚的・感性的に「よそ」ものと識別した他者に対しては「モノ」や「動物」のように扱い、さらに犯罪行為に及んだ場合にも罪障感が希薄なのである。

さらに、かれらは、その口癖のごとく「いちおう～する」「とりあえず～する」のであり、常に暫定的な態度を崩さず、未来展望が希薄である⁴³⁾。

これもまた、これまでの人生のなかで常に他から管理され、自主的・主体的な決断を下す機会に乏しかったかれらの、「多元化した価値が相互に十分な関連性をもたずに分散化して」⁴³⁾ 先行きが不透明な現代社会に「自分は何者か」をもおぼろげな不安定な存在のまま生きる⁴⁴⁾ かれらなりの处世術の一つ、適応の型であり、これによって自らが他の可能性を断念してまで下した一つの「勇気ある」決断が「誤り」であったと判断された際の自己への衝撃力をやわらげ、あるいはまた対象との濃密な関係性を回避しようとするのである。

第4章 現代青年の人間関係

そして、以上に見てきたような性格特性を有しているがゆえに、今日の青年の人間関係は広がりをもたず、いわゆる「オタク」⁴⁵⁾ にその究極の形を見ような、先述の「うち」「そと」意識がさらに一層明確化した同質的で限定的なものとなる⁴⁶⁾。

本来、万人に対して開かれているはずのかれらの「部屋」の「窓」や「扉」は、特定の「気の合った」友人以外にはしっかりとその内側から鍵がかけられるようになるのである。

そうしたなかで、ようやくの思いで得たこれらの「気の合った」友人を失い、再び孤独感や自己喪失感にさいなまれるのを極端に恐れるかれらは、先の未来展望の希薄さともあいまって、その既存の、現在進行形の関係を一層閉鎖的なものとしがちであり、自分たちとは異質な多数の他者との関係性を回避して、その内部の同質的關係に（自己確立も一時停止して）没我的に執着するため、他のグループとは情報交換はしても、相互に理解し合おうとするコミュニケーションを交わすことは少ないという保守的・セクト的な性向を見せるのである⁴⁷⁾。

近年の「カラオケボックス」、「ビデオボックス」など「ボックス空間」の増加やポケットベル、携帯電話の普及はこうしたかれらの性向と深く連関したものと考えられよう。

こうした「ボックス空間」は、「関係のない」他者との心理的・肉体的に不

快な接触を回避し、自分のまわりを本当に気の合った仲間だけで「囲い込み」といって願う現代の青年にとってまさに空間的にもうってつけの場であり、しかも、その内部では、かれらは、例えばカラオケボックスにおいて日常的に見うけられるように、お互いに会話もせず、他人の歌を聞くふりをしつつ、自分の歌いたい歌をひたすら探す。すなわち、先にも述べたように、気のおけない仲間と同じ場所には居ながらも、お互いに干渉はせず、それぞれの個を優先させることが可能なのである⁴⁸⁾。また、ポケットベルは、従来の電話においては不可能であった、だれからサインが送られてきているのかを知ることができ、携帯電話では、日常的にコミュニケーションしたくない人にはその電話番号を知らせないでおくことも可能である。さらに、双方とも、たとえ「身内」の者との間でも、「気分が乗らない」場合には文字どおりその関係性を一時 OFF にしておくこともできるのである。

さらに、これまでに述べてきた現代の青年にほぼ共通すると考えられる心性、すなわち、他者との競争・比較による精神的疲弊から劣等感・孤独感などの人間存在にとってネガティブな諸感情を生起させ、その結果、他者との協調的關係を構築し、さらに「自分らしさ」、自己実現を達成したいと願う志向性を強めながらも、他者というものをよく知らないところから、それらに対して強い攻撃性⁴⁹⁾や恐怖感を先行させ、他者に対して先述のようなかれら特有の「やさしさ」を十分表出することができず、これまた先述の閉鎖的な友人関係をも築くことのできない者も少なくない。

そうしたかれらは、一方では、いじめ場面におけるいじめ加害者に見られるように、物理的な力を背景とした強制的な人間関係を志向し、またそのいじめ行為を見た周囲の「観衆」や「傍観者」が喜ぶことを自らへの支持、自らとより広い範囲の他者とのつながりの成立ととらえ、これを前提とした「自己実現」をはかるため、さらにその志向を強固なものとする。

尊敬の念を抱かれようが、恐怖感を抱かれようが、ともあれ他者が自己を無視できない存在であると承認してくれているという実感が、かれらに安心感・安定感をもたらすのである⁵⁰⁾。

また一方で、近年急増している不登校生徒に見られるように、人間関係構築の困難さからこれを忌避し、自分の「部屋」の窓や扉をかたく閉ざして、内部

志向を強める者もある⁵¹⁾。

かれらは、いまある「不確定・不完全な自己」がさらに破壊されるのを恐れ、また、そこから生じるすべての不安や困難を「隠蔽」するため、対人関係から生じる摩擦や葛藤⁵²⁾を避けて、その代替者としてのペットやぬいぐるみなどとの関係に閉じこもったり、自己との「対話」を繰り返す⁵³⁾。

その結果、それだけでなく「自分が何者かわからない」という自己不安に強くとらわれ、「自分のことで精一杯で、他人のことなどかまっていられない」心的状況にあるかれらは、利己的性格をより顕著なものとし、自己の準拠枠としての他者を失ってますます自らの価値観への固執を強める⁵⁴⁾。

また他方で、こうしたナルシストたちは、「ほんとうの自己ではなく自己のイメージを愛する」⁵⁵⁾がゆえに、その理想的な「自己のイメージ」を形成する自らの超自我と常に向き合い、現実の自己とそれとのギャップを実感するところから、自己のいわば負の側面を継続的に自覚・認識することによって、劣感を絶え間なく再生産するのである。

しかし、こうした攻撃的あるいはナルシスティクな性格特性を示す青年は、異端な存在ではない。むしろかれらは、先に述べた「やさしさ」に満ちた青年とともに現代に特徴的な性格特性を有する青年の典型、いわば理念型であり⁵⁶⁾、実際の多くの青年の性格構造のうちには、これら三つの性格特性がその強弱の差こそあれ、まさに十人十色の割合で混合されているのが常態であろう。

それゆえに、かれらの「やさしさ」は、自らの仲間内に向けられた「ナルシスティク」なものなのであり、自閉する青年は、何らかの事柄に著しく執着した未来展望の希薄な「オタク」となりがちなのである。また、ナルシシズムと過同調とを同時に顕在化させる権威主義的性格を示すものも今日多く見うけられる。

そして、こうしたかれらは共通して、現状に対する不充足感から「本当の自分の居場所」を求め続けるのである。

おわりに

以上に述べた現代青年論は、今日のかれらをややネガティブにとらえすぎているという感をもたれるかもしれない。

しかし、たとえそれが、著者自身の自己反省を踏まえ書かれたものであるとしても、こうした現状批判のみが強調されることは、これまた著者の本意とするところではない。

すなわち、現代青年の諸特性は、その現代性ゆえに旧来の因習的な人間関係やこれに関する諸規範を改変する可能性をも有している。

かれらがもつ「やさしさ」は、他者の属性にかかわらず平等にそれらの他者との共生を志向するものであり、競争的な既存の産業社会への対抗原理となる得るであろうし、他者の内面にまで容易に踏み込もうとしないかれらの禁欲的な姿勢は、（たとえ自己と非常に親密な関係にあるとも）他者を（自己とは異なる）独立した個として承認する本来的な個人主義発展の萌芽を包含し、E・フロムがいうところの「to be（自分である、奥深い自分に忠実である）」的、自己実現を自他双方に許容・促進させ得る寛容性の基礎をなすものであろう。

ただし、こうしたかれらの志向を現実化し伸長させるためには、その絶対的な前提として、かれら青年たちがより多数の他者とかかわりあい、これによってそうした多数の他者を「モノ」ではなく、自らと同じ人間であり、「身内」さらには「自己の一部」とさえ認識することが不可欠であろう。

こうした状況の現出は、容易ならざるものであるが、反面、現代社会においては不可避免的に他方面から整えられつつあることもまた事実である。

すなわち、環境問題など未曾有の全世界的、人類の規模の課題に直面することによって、青年のみならずわれわれ人間は国境をも越えて連帯しなければならない局面にたちいたっているであり、これに向けての歩みが潜在的正機能として青年たちの他者との連帯をも創出・促進する可能性がある。

さらに、人間観の変遷により今日では、生涯教育の高まりにも見られるように、われわれの人格の発達は生涯にわたる連続的過程であり、自己というものの意識も絶えず変容を繰り返すものだとする考え方が主流となりつつある。

これによって、青年たちの強迫的な自己規定への志向も緩和されるであろう。

そして、これらから、かれらはより肩の力を抜いて、より自由に今ある自己を多くの他者にストレートにぶつけていくことが可能となれば、その結果として、従来までのものとは異なる新たな人間関係の構築、さらには自己実現がはかられるのではないだろうか。

註

- 1) 本論でいう青年とは、今日においては、すでに大学を卒業し、職業生活を営んでいる者のなかにも心理的モラトリウムを享受する者が相当数存在すると想定されることから、一般的な人間の発達段階区分よりもやや広く、12, 3歳～27, 8歳くらいまでの人間の総称として用いられる。
- 2) 親友をいじめによる自殺で失い、自らもいじめられた経験のある中学2年生の談話より抜粋（1995年11月27日付『朝日新聞（大阪本社版）』夕刊「居場所をください 5」参照）。
- 3) 例えば、大阪・戎橋に集まる「橋の子」が挙げられよう。そして、かれらは「傷を負った寂しい子ばかり」なのであり、「自分を愛してくれる人がほしくてたまらな」い者たちなのである（1995年11月29日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊「追跡 道頓堀川事件 中」参照）。
- 4) 総務庁の「青少年問題の現状と対策」（1992年度版青少年白書）によれば、個室をもつ中学2年生は1986年の48.7%から1991年には57.3%に増加しているという（1993年1月12日付『朝日新聞（大阪本社版）』夕刊参照）。
- 5) 例えば、ダイヤル・サービス（本社・東京）が開設している「子ども1110番」のいじめをテーマにした緊急討論会においても、このことは指摘されている（1996年1月15日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊参照）。
- 6) そして、こうした「自分とは何か」という問いは、究極的には「人間とは何か」という問いに至るのであり、これが今日の青年たちの間での哲学ブームにつながっているのではないだろうか。
- 7) 本論の展開のベースには、著者自身の経験があり、いわば本論は著者自身を対象化した一つの事例研究といえる。無論、そのために、科学研究に不可欠な、客観性の欠如という指摘を受けるかもしれない。だが、事例研究一般に関しては、個々の事例を包摂する一般的法則を発見し定立するため、個々の事例を見るというその存立が学問世界の公的認知を得ていよう。また、自らを研究対象化することについては、それほどの懐疑主義者ではないつもりの私においても、数量調査の「被調査者がすべて本心を語っていると」という大前提を信じることはできない。しかし、これに対して、私自身の事柄に関しては、私自身が一番多くの情報をもってお

り、また私自身が誠実であれば、先の大前提の真偽を問う必要もない。そして、なにより自然科学との比較において、社会科学を含んだ人間の科学には、「理解」が必要であろう。研究対象との共感的理解が達成されてはじめて、一見パラドシカルな人的現象も、同一のエネルギーの両極端な表出であるとみなせるなど、より深遠・重厚な調査研究が展開されるのではなかろうか。それが最も可能な研究対象こそ、また自分自身なのである。

8) 1995年4月23日付『朝日新聞(大阪本社版)』朝刊「社説」

9) 大正大学が、1995年夏に首都圏の57の4年制大学に通う男女600人を対象に実施した調査では、調査対象者の9割が「現在は競争社会と思う」と回答し、他人との競争を初めて意識した時期に関しては、「9歳-10歳」(調査対象者の16%)、「11歳-12歳」(同13%)、「15歳-16歳」(同12%)という比較的若い年齢段階が上位1-3位を占めたという(1995年11月28日付『朝日新聞(大阪本社版)』朝刊参照)。

10) オーストリアの精神分析学者A・アドラーによれば、人間には優越感を得たいという根源的欲求が存在するという。それにもかかわらず、それとはまったく逆のこのようなネガティブな諸感情が現代の青年たちのうちに生起することの問題は大きいであろう。

11) 栗原彬『やさしさのゆくえ=現代青年論』ちくま学芸文庫 1994年 168頁

12) 当然このなかには、最初からこうした競争の場を忌避し、その「土俵」には上がらない、「不戦負」者たちも含まれるであろう。

13) こうした関係を希求することが、われわれ人間に本来的・生得的なものなのかどうかは定かではない(われわれに孤独を感じる能力や他者を愛する能力が備わっていることは、これを肯定するものだとも考えられようが…)。しかし、ここではそのことを問題にするのではなく、そうした性向の高まりという事実そのものに着目しているのである。

14) 発達段階的にも、青年期は自己発見の時期であることが、かれらのこうした志向をより強めるものであると考えられる。また、A・ストーも、(人格の)「成熟という現象の特徴は、敵対心と競争心を伴うことなしに、自己の人格を肯定し、かつまたこれを主張する点にあるのではないかと思われる」(A・ストー 山口泰司訳『人格の成熟』岩波書店 1992年 79頁)と述べている。さらに、1993年1月26日付『朝日新聞(大阪本社版)』夕刊「F21 若者たちの解放区」には、まさに本論

で展開した他者との競争から協同へというライフ・プロセスを経た30歳代女性の回顧が掲載されている。

15) A・ストー 前掲書 39頁

16) 自己意識は社会的産物であり、他者との交渉なしに単独で成立することはできない（谷村覚『『他者の他者』としての自己』梶田勲一編『現代のエスプリ 307』至文堂 1993年 53頁）。「最初の自己意識は、他者から与えられるのであり、他者の評価を反映することによって構成される」（桐田克利『苦悩の社会学』世界思想社 1993年 12頁）。つまり、「人間は他者との相互作用によって存在し、その相互作用を通して形成される」（矢野峻『地域教育社会学序説』東洋館出版社 1981年 71頁）存在なのである。

17) 西洋的なものとは異なる日本人に特徴的な人格の自律性に関しては、対馬海峡からこちらの日本文化が「鍵のない文化」と言われる一方で、家族の間においても厳しく食器を区別する文化でもあり、日常作法でも自他の区別が厳しく、「己」をわきまえることが要求される文化でもあることなどから、その存在がほぼ確証されるであろう（山口恒正「自己意識の誕生」梶田勲一編 前掲書 37頁参照）。

18) このことは、例えば、先の「居場所」の比喩を用いて逆に表現するなら、これを得たと実感し得る者は、その「窓」や「扉」を通じて、手紙などの文書上のあるいはテレビなどメディアを通じた間接的な方法ではなく、実際の他者（その他者がどのような性格の人物であり、自己にどのような影響をもたすかは未知であるという危険性をともないながらも）と直接のやりとりを交わし、それらを認知・認識しているということである。

19) そうであるがゆえに、「対人的苦悩が存在の苦悩を強化し、前者から後者への移行をうながす」（桐田克利 前掲書 192頁）ことも稀ではないのである。

20) 前出の栗原彬氏は、ここまでの本論の要旨とほぼ同じ内容を「青年のやさしさも、さびしさの土壌から生まれる」（栗原彬 前掲書 83頁）という表現でまとめられている。

21) かれらは、他者の感情を損なえば、当然その怒りの矛先が自己に向くであろうことを承知しているのである。

22) 安心して寄りかかることのできる社会的根拠をもった絶対的な価値というものが崩壊し、普遍的な価値を共有しない個別主義の台頭が見られる現代において、子ど

もたちに何を示すべきか確信がもてず不安な親たちは、今日の青年同様「やさしく」、「子供に理解を示し、あえて内面に踏み込もうとはしない」（1996年1月12日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊「いろいろ不安 9」）ため、かつてのような厳格なイメージはなく、「フレンドリー・ファミリー」形成の傾向を強める。また、そうしたかれらが子供のしつけでもっとも大切なこととして挙げるのは、（他者への）「思いやり」であり、自分の子供をどんな人間に育てたいかという問いには、「他人に迷惑をかけない人間」という回答が最も多い（調査対象者の43%）という（1995年1月6日付『読売新聞』朝刊「子育て 全国世論調査」）。ここからも、本論で論及する今日の青年たちの他者志向性、過同調傾向が親によって準備されたものでもあることがうかがえよう。また、その結果、今日、実際にかれらは、「他人に迷惑さえかけなければいい」という価値観をもち、さらには心配をかけないことが家族へのやさしさであると考えてるのであり（大平健『やさしさの精神病理』岩波新書 1995年 10頁参照）、未成年の飲酒や喫煙、売春などに寛容な姿勢を示し（1994年11月25日『朝日新聞（大阪本社版）』夕刊「植島啓司が問う 快楽は悪か 6」参照）、もし、自らが学校等でいじめられていても、その事実を明かさないのである。

23) こうした現代青年の特性は、かれらの発達段階のより早い時期から見うけられる。八方美人の子ども版ともいうべき、周囲の他者に合わせるため「受け」を気にする「八方少年」（1993年2月15日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊）が、今日、小学校段階でも存在するのである。

24) このような状況を、1995年1月16日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊「社説」では、現代病の一種として『「私」肥大化症候群』、「他者透明化症候群」と名付けている。また、これは、換言すると、現代の青年は、自分が愛している他者やかかわりのある他者から「愛されたい」と願うエロスはもち得ているが、対象を問わず、無差別的に自らの愛や思いやりを与えたいと望むアガペーは持ち合わせていない、ということができるだろう。

25) 大平健 前掲書 71頁

26) また、財団法人日本青少年研究所所長の千石保氏は、著書のなかでこうしたかれらの「やさしさ」を、他者が困っているときに自分が犠牲になっても助ける、相手が間違っているときに忠告するといった「やさしさ」ではなく、「一切無干渉の、距離をへだてた冷酷な人間関係」とであると分析している（1994年7月3日付『朝日

新聞（大阪本社版）』朝刊「社説」参照）。

27) 倉光修「現代青年の自己意識と対人関係」梶田毅一編 前掲書 109-110頁

28) 特に、それまでの発達過程において、常に他者の管理下におかれることの多かったかれらは、そうした状況への反発もあり、この志向をより強めるであろう。

29) 「自己の同一性について確信のもてない青年は、人間関係の親密さからしりごみしてしまう」（E・エリクソン 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房 1973年 119頁）のであり、また逆に、マス・メディアの発達により、情報環境のなかで育ち、コンピューター機器と親和的なかれらはそれらから得られる情報を好む。その内容の真偽は別として、情報は一面的であり、なにより感情を（少なくとも「生」の状態でストレートには）運ばないためである。

30) 1996年1月12日付 前掲新聞

31) また、これらの事実からも明らかなように、自己の内面を隠秘しようとする現代の青年の性向が、（かれらが仮に）いじめ被害に遭っていてもその事実関係を他者に相談しないという傾向や、今日において異世代交流がより困難化していることの一つの強化因として考えられよう。

32) 倉光修 前掲論文 梶田毅一編 前掲書 106頁

33) 1995年5月24日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊に掲載された高校生の表現。無論かれらのこうした表現の背景には、「本音」と「建前」とを峻別し、前者をむやみに他者に見せるのは「恥」だとする日本文化の特性の内面化が作用していることも事実であろう。また、より広い範囲で、男性に関しては、社会化過程において「男らしさ」が付与されるにつれ、あまりに自己をさらけ出すことはマイナスであるという観念が固定化してゆくことの影響も考えられる（G・アラン 仲村祥一、細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社 1993年 111-112頁参照）。

34) 総務庁青少年対策本部の「第5回青少年の連帯感などに関する調査」（1990年）においても、「生きがいを感じるとき」として、調査対象者の高校生の67.9%が、「友人や仲間といるとき」と回答しており、しかもこの回答の割合は、1970年の同調査第1回時（46.1%）よりも大幅に増加している。にもかかわらず、NHK放送文化調査研究所の「中学生・高校生の生活と意識」調査（1987年）では、調査対象者の中学生のうち43.0%、同高校生30.2%が、親友とのつきあい方においても「心の深いところはださないでつきあう」、「ごく表面的につきあう」という項目を肯定

しているのである（総務庁青少年対策本部編『平成3年度 青少年白書』大蔵省印刷局 58-59頁、京都市『ライフ・コースから見た現代の青少年』 1993年 71-72頁参照）。もはやかれらのいう「やさしさ」とは、他者とお互いの心の傷をなめあう「やさしさ」ではなく、お互いを傷つけない「やさしさ」なのである（大平健前掲書 167頁参照）。

- 35) 博報堂生活総合研究所も、1994年1月1日時点で19歳から22歳だった「第2次ベビーブーム世代」を対象にした意識調査の調査結果で、かれらの特徴は「社会のシステムにも、他人との関係にも、摩擦を回避する考え方、行動パターンをとる」ことであると結論づけている。また、現代の青年に交際に関する意識、行動を問うた別の調査などでも、「恋人とつきあっている、相手にあまり拘束されたくない」という回答が調査対象の男女とも圧倒的多数を占めるなど、かれらがお互いに縛らず緩やかに自立した関係を望んでいることもうかがえる（1994年6月21日付および1996年1月16日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊参照）。
- 36) また、新（々）宗教など宗教への入信の動機としては、他に、日々周囲の人間から理解され受け入れられることを目指しているながらも、そうした他者から一定の評価をうけ受容してもらえない青年は、その代償として、超越者からの安定した「まなざし」を求める、といったことが考えられよう（梶田叡一「まなざしのダイナミクス」梶田叡一編 前掲書 80頁参照）。
- 37) その一つの結果が、作文が書けない、夏休みなどの課題の「自由研究」さえマニュアル本に頼らなければ完成させることができないという者の出現であろう（1995年8月9日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊参照）。また、知識注入型教育に関していえば、与えられた課題を反復練習するという日本的な学習スタイルでは、創造性、主体性の伸長もそれほど期待できないのであり、これがまた現代の青年がなかなか自己を確定できない要因の一つとなっているのである。
- 38) これとは対照的に、情報の「対面的な摂取スタイルは常に五感によるフィードバックを可能とさせ、情報の受け手は、そこに情報の『絶対性』『信頼性』を感じることができ」（小谷敏『若者論を読む』世界思想社 1993年 174頁）るのである。
- 39) 無論、より普遍的に青年期は身体的にのみならず、あらゆる側面に自他共に潔癖を求める時期であることは私も実感・了解している。ただ、ここではその強度を問題にしているのである。

- 40) 無論、消費者に好印象を与え、その購買欲求を刺激するというものである。
- 41) 「明るく振る舞って自分自身をだましていないと、どこまでも深い悲しみの淵に落ちこんでしまうような気がする」(著者日記)のであり、反対に、見知らぬ他者への無表情にも同様の心的メカニズムを見出すことができる。現代青年にとって、「明るさ」や「無表情」は、自己の内面を隠蔽する「マスク」なのである。
- 42) このことは、先程の、かれらがプロテウスの人間であったことから想起される。また、近年の定職に就かない青年たち、いわゆる「フリーター」の増加にも見てとれる。さらに、実際に、財団法人日本青少年研究所などが日本、米国、台湾の高校生を対象に行ったライフスタイル調査でも、「先のことは考えず今を楽しむ」という日本の高校生は52%に達し、米国の22%、台湾の13%を大きく引き離したという(1994年7月3日付前掲新聞参照)。
- 43) 井上俊『死にがいの喪失』筑摩書房 1973年 256頁。
- 44) 近年の「占いブーム」の背景にも、こうしたかれらの存在を確認することができよう。
- 45) また、この何らかの事柄(だけ)に熱中する「オタク」達の姿にも、「それ(かれらが熱中している事柄)が将来の自分にとって何の役に立つか」ということを度外視した、先述の計画性・未来展望の希薄さが垣間見られる。
- 46) さらに、「オタク」的に、少数の者が、ある特定の事柄に関する専門的知識を深めていけば、門外漢としてその輪の外に置かれる多数の者は、ますますかれら(少数者)の語る話題についていけなくなり、結果このような同質的・限定的な人間関係はさらに強固なものとなる。
- 47) このことが、今日のいじめ場面におけるいわゆる「仲裁者」の減少の一要因とも考えられよう。かれらにとって、たとえクラスメートがいじめられていようと、自分たちのグループ外の人間であれば、それは自分たちとは「関係のない」出来事なのであり、無頓着・無関心なままでいられるのである。
- 48) 1994年6月24日付『朝日新聞(大阪本社版)』朝刊「天声人語」
- 49) よく知らない他者から攻撃されるのではないかという不安の強さが、先制的な攻撃として現出するのである。
- 50) 梶田叡一「力の重要性の自己感覚を求めて」梶田叡一編 前掲書 101頁
- 51) こうしたかれらにおいても、根源的には、他者との関係性を求めていることは、

多くの不登校生徒が、不登校開始から一定期間を経過した後、他者とのかかわりを求めることや、私が直接かかわった一人の不登校生徒が、かつての戦国大名や映画俳優を「さん」「君」づけで呼び、かれらと架空の疑似的な友人関係を構築していたことから推察される。あくまでも最終的に目指されるものは他者なのであり、アプリオリに設定可能な前提として、人間はコミュニケーション動物であり、常に他者とのコミュニケーションを必要とする、ということが挙げられる。自己にとって他者は、(自己の)承認者であり破壊者でもあるという両面価値を有した存在であるがゆえに、このような逆説的状況が生じるのである(小谷敏 前掲書 195頁参照)。

- 52) 「絆(ほだし)なしの絆(きずな)はありえない」(大平健 前掲書 85頁)のである。
- 53) このような状況におかれた個人は二重の孤独を経験する。一つは、他者と疎遠であるという明示的な孤独であり、もう一つは、「本当の自分」というものに「出会えない」というより内面的な孤独である。
- 54) こうした自己の価値観への固執傾向も、先述の「オタク」に共通して見られるものである。
- 55) A・ローウェン 森下伸也訳『ナルシズムという病い』新曜社 1990年 167頁。
- 56) 繰り返しになるが、これらの性格類型の根底には、共通して自己の不確定性がみられるのである。

参考文献

- (1) 笠原嘉『青年期』中公新書 1977年
- (2) 中野収, 平野秀秋『円盤に乗ったコミュニン』光風堂書店 1977年
- (3) 中野収『まるで異星人』有斐閣 1985年
- (4) 浪花博, 鶴飼信行, 杉野欽吾『教育心理学』八千代出版 1986年
- (5) J・ガラルダ『アガペーの愛・エロスの愛』講談社現代新書 1995年
- (6) 小浜逸郎, 諏訪哲二『間違いだらけのいじめ論議』宝島社 1995年
- (7) 仲村祥一編『現代的自己の社会学』世界思想社 1991年
- (8) 大平健『豊かさの精神病理』岩波新書 1990年

- (9) 芦沢俊介編著『少年犯罪論』青弓社 1992年
- (10) 鮎川潤『少年非行の社会学』世界思想社 1994年
- (11) 落合良行『青年期における孤独感の研究』風間書房 1989年
- (12) G・P・ナップ 滝沢正樹, 木下一哉訳『評伝エーリッヒ・フロム』新評論 1994年

(いまにしやすひろ 佛教大学大学院社会学研究科博士課程)

The Social Character of Modern Youth

Yasuhiro Imanishi

In this paper, the author, drawing on his personal experiences, studies the social character of modern youth and some possibilities of future development.

Today, many youngsters have to compete in many races from the early stages of their life, so that most of them feel alienated in one way or another.

As a result, they take on a particular social character.

At its core, This character is extremely other-directed, as a result of decreasing human relation. It is the antithesis. More over, of the value of achievement and the value of production in modern society.

This character determines their present behavior and relations with others.